



Title	交換留学のための英語学習支援 : Project HELP ! と タンデム学習プロジェクトの比較から
Author(s)	林, 貴哉; 中野, 遼子; 垣塚, 保子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流セ ンター研究論集. 2024, 28, p. 65-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94691
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

交換留学のための英語学習支援

— Project HELP! とタンデム学習プロジェクトの比較から —

林 貴哉*・中野 遼子†・垣塚 保子‡

要 旨

大阪大学国際教育交流センターでは、海外留学実現のために必要な英語力の獲得を支援するために、2015年度から英語メンタリング学習プログラム「Project HELP!」を実施してきた。本稿では、HELP!と同様、得意な言語が異なる学生同士がペアとなって言語学習を行うプログラムとして、2012年度から大阪大学文学研究科・文学部で実施されてきた「タンデム学習プロジェクト」を比較対象としながら、HELP!におけるコーディネーターの役割を検討した。

【キーワード】 交換留学、IELTS、英語学習、正課外活動

1 はじめに

大阪大学から海外の大学への交換留学は「本学正規課程の学生が、学生交流協定(覚書)を締結している海外の大学(以下「協定校」)に、概ね1年以内の1学期又は複数学期の間、本学に在籍したまま、協定校において科目履修又は研究指導等の教育の機会を得ること」と定義されており、留学先での勉学・研究に英語を使用する場合、協定校が定める語学能力基準に加え、TOEFL iBT (Test of English as a Foreign Language, Internet-Based Testing) で79、または、IELTS (International English Language Testing System) のアカデミック・モジュールで6.0という大阪大学の語学能力基準を満たすことが求められている(大阪大学, 2023, p.3)。

大阪大学国際教育交流センターでは、海外留学実現のために必要な英語力 (IELTS6.0) の獲得を支援するために、ブリティッシュ・カウンシル日本(以下、BC)と日本英語検定協会(以下、英検協会)の協力のもと、2015年度から英語メンタリング学習プログラム「Project HELP!」(Harmonized English Language

Program, 以下、HELP!)を実施してきた。HELP!では海外留学に向けて英語能力を向上させたい「メンティー」(大阪大学の学生)と、その英語学習をサポートする意思のある「メンター」(主に大阪大学への留学生)をマッチングし、3か月の期間内に8回(1回につき90分)の「メンタリング」(英語学習)を英語で行う。

HELP!のシステム構築の経緯や、具体的な運営スケジュールについては歳岡(2016)や中野・近藤(2019)に詳しいが、本稿では、大阪大学国際教育交流センター短期プログラム開発研究チームの教授、准教授、特任助教、事務スタッフによって担われてきたHELP!のコーディネートの方法について報告を行う。以下、この4名をコーディネーター¹⁾と呼び、HELP!のコーディネートについて論じる手がかりとして、HELP!と同様、得意な言語が異なる学生同士がペアとなって言語学習を行う対面式タンデム学習を比較対象とする。

タンデム学習とは、異なる母語を話す2人の学習者がペアになり、互いの言語と文化を学び合う学習形態のことであり、後述するように、互惠性と学習

* 武庫川女子大学文学部講師

† 東北大学大学院歯学研究科特任講師

‡ 元大阪大学国際教育交流センター事務補佐員 Project HELP! 担当

者オートノミーという2つの原則に基づいて実施される (Little & Brammerts, 1996)。タンデム学習には実際に会って実施される「対面式タンデム学習」と、Eメールやチャット、インターネット通話などを利用して遠隔で実施される「E タンデム」があり、日本の大学では正課内・外活動として多様に実施されている (小林, 2016; 脇坂・林・北川・ヴォランスキ・原田・蔡, 2020)。

大阪大学では2012年4月に文学研究科・文学部において対面式タンデム学習プロジェクトが開始され、現在は「大阪大学人文学研究科・文学部タンデム学習プロジェクト」(以下、タンデム)として継続されている。人文学研究科・文学部の基盤日本語学講座と国際連携室の教員が担当教員となり、基盤日本語学講座の大学院生、学部生、修了生がリサーチアシスタントやアルバイトとしてコーディネーターを務めてきた。

本稿では、タンデムのコーディネートに関する先行事例や、タンデムへの参加経験を有する第一筆者、第二筆者の経験を参照しながら、HELP! のコーディネートについて検討を行う。

2 HELP! とタンデムの実施の概要

2-1 HELP! の実施の流れ

本稿での議論を進める上での背景として、各プロジェクトの実施の概要をまとめておきたい。相互に言語学習を行うタンデムと比較すると、HELP! では、英語学習を行うメンティーと、かれらのサポートを行うメンターの役割が異なるため、コーディネーターもそれぞれに異なる働きかけを行っている点が特徴的である (表1では2022年度のスケジュールを示している)。

メンティーの応募資格には、海外留学を目指して自主的に英語学習を行う意志があること、HELP! の参加後にIELTSを受験することなどが求められている。このような参加条件を周知するための機会として、「メンティー募集説明会」が設けられている。メンタリング開始後はメンタリング毎に、オンラインの学習支援システム「MEnTOR System」上のカルテに学習進捗に関する報告を英語で3文以上書くことになっている。メンタリング8回を完了後は、メンター評価やIELTSの受験が求められる。

メンターにとってHELP! は、英語教育の経験を得

ることができたことを示すものとなる。プログラム開始時のオリエンテーションにおいて、BCによるIELTSの教授法に関する研修を用意している。8回のメンタリングでは、メンティーの英語学習の支援に加えて、メンターが記入したカルテにコメントを記入することが求められる。これらの課題を達成したメンターには修了証が授与される。

参加者同士の親睦を深める機会として、各年度の状況に応じて、学期途中に交流会、HELP! Café、ワークショップなどが開催されてきた。

表1 HELP! の実施スケジュール

日程	内容
3月中旬/ 9月中旬	メンター募集開始 メンティー募集説明会
4月上旬/ 10月上旬	メンティーの募集開始
4月中旬/ 10月中旬	メンター・メンティーの募集締切 →マッチング作業・結果通知
4月下旬/ 10月下旬	オリエンテーション (全員参加)
5月/11月	メンタリング開始 (3か月以内に90分を8回実施) ・メンティーはカルテに英語で学習記録を記入 ・メンターはメンティーのカルテにコメントを記入 中間アンケート実施
6月/12月	ワークショップ
7月/1月	メンタリング終了
8月/2月	メンター審議・認定証発行 終了後アンケート実施 メンティーはProject開始から6か月以内にIELTS受験

2-2 タンデムの実施の流れ

大阪大学におけるタンデム開始のきっかけには、短期留学生の増大によるチューター経費の増大という財政面の問題解決と、日本人学生と留学生の交流の促進という2つの理由があった (青木・脇坂・欧, 2013)。コーディネートをを行っているのは人文学研究科・文学部であるが、タンデムの対象は学生・教職員を含む大阪大学の構成員に開かれている。人文学研究科・文学部の日本人学生の外国語学習のニーズと留学生の日本語学習のニーズが一致しなかったとしても、他研究科・学部の学生等とのマッチングによりペアを組むことが可能になる。

タンデムでは参加者が互いに言語学習者となり、

互いに双方の学習の支援者となるため、表2で示した通り、すべての参加者が同一のプログラムに参加する。また、HELP!のオリエンテーションはすべての参加者に対して同時に実施されるが、タンデムのガイダンスはコーディネーターとペアの3名で個別に実施される。語学試験の受験などは義務付けられておらず、目標は個別に設定する。

第一筆者（林）は、2013年度後期よりタンデムに参加し、中国語とベトナム語を2学期ずつ学習した。参加者としてだけでなく、2014年度から2020年度までは、サポートスタッフやリサーチアシスタントとしてタンデムの運営にも携わっていた。また、第二筆者（中野）は2020年度前期と後期にタンデムに参加し、英語とドイツ語を学習した経験を有する。それぞれがタンデム学習の経験をHELP!のコーディネーターにどのように活かし得ると考え、どのような実践を企画・実施したのかについても後述する。

表2 タンデムの実施スケジュール

日程	内容
4月上旬/10月上旬	参加者募集開始
4月下旬/10月下旬	参加者募集締切 →ペアリング作業・結果通知
4月末/10月末～	タンデム学習ガイダンス (ペアごとに日程調整) タンデム学習開始 (頻度・回数は自由)
6月中旬/12月上旬	タンデム学習プロジェクト・パーティ タンデム学習ワークショップ実施
7月末/1月末	プログラム終了 (ペアごとに自主的に継続する場合もある)
7月中旬/2月中旬 ～8月中旬/3月中旬	参加者アンケート実施

3 タンデムにおけるコーディネーターの役割

3-1 学習者オートノミーと互惠性

HELP!のコーディネーターを検討する前にタンデムのコーディネーターについての先行研究を整理する。タンデムをコーディネーターする上で重要なのは、学習者オートノミーと互惠性という2つの原則を参加者に伝えることである。

学習者オートノミーとは「自分の学習に関する意思決定を自分で行うための能力」であり、「学習の目的、目標、内容、順序、リソースとその利用法、ペ

ース、場所、評価方法を選べる」といったことが含まれる（青木・中田, 2011, p.2）。一方、互惠性について脇坂（2012）は、タンデム学習における互惠性を「パートナーが互いにそれぞれの学習目標を達成し、言語学習の成果を上げるために助け合う関係」と定義し、タンデム学習では教えるという意識よりも、「互いに言語を学ぶという意識を持って活動が行われる」と指摘している（p.77）。これらの原則を踏まえると、タンデムに参加する際には「何をどのように学習するか、パートナーにどのように助けてほしいかを自分で決めることを求められる」（青木・脇坂・欧, 2013, p.1）。

タンデムで行うのは自分の母語（得意な言語）をパートナーに「教える」ことではなく、自分がパートナーの得意な言語をどのように「学ぶ」か、それをどのように「助けて」もらうのかを考えて実行することである。一方、パートナーが自分の言語を学ぶ時間には相手の希望を聞いて、その通りに手助けすることが重要となる。この原則が守られず、双方が「教える」側の役割を担おうとしてしまう場合がある。そうすると、相手に自分の言語を教えたい「教師」が2人いるのにも関わらず、それを積極的に学ぶ「学習者」がいないという状況になり、学習の継続が難しくなる。このような状況にならないように、コーディネーターから参加者に働きかけを行う必要がある。

3-2 コーディネーターからの働きかけの方法

脇坂（2016）にはタンデムにおけるコーディネーターの役割に関する記述がある。脇坂はタンデムの特徴として、「タンデム学習では一対一で学習を進めるため、コーディネーターが参加者の学習に直接関与することはできない」、「パートナー同士が良い関係を築くことがより効果的な学習につながるため、コーディネーターが安易に二人の間に入るのは好ましくない」という2点を指摘している（脇坂, 2016, p.95）。脇坂はこれらの特徴を踏まえ、コーディネーターの役割は「それぞれの学習者にとって適切な学習環境をペアの2人で作っていけるように、基礎となる環境を整える」ことだと指摘し（脇坂, 2016, p.95）、具体的に実践していることとして、以下の4点を示している。

- ①適切なガイドラインを作成すること

- ②学習者が必要なリソースへアクセスできるようにすること
 - ③学習について振り返る機会を提供すること
 - ④各ペアの良好な関係構築をサポートすること
- (脇坂, 2016, p.95)

脇坂(2016)の示す①～④に関して、タンデムでは、①ガイダンスでのガイドライン²⁾の配布、②ガイダンスで学習計画や第1回のセッションでの具体的な学習内容について決める手助け、③振り返りの推奨、ワークショップの実施、④パーティーの実施が行われている。

コーディネーターの介入の程度について、タンデム学習の運営に関するFAQを示した青木(2016)においても指摘がある。「教師は参加者がタンデム学習で何をしているかモニターすべきか?」という問いに対して、それを嫌がる学習者は少なくないことを踏まえ、学習場面を直接モニターするのではなく、満足度や進捗の度合いの自己評価をモニターすることや、定期的にアドバイジングのセッションを設定することなどを提案している(p.103)。

3-3 タンデムにおける言語学習アドバイジング

ここでは、タンデムの取り組みを言語学習アドバイジングという観点から整理しておきたい。言語学習アドバイジングとは、アドバイザーと言語学習者の対話を通じて、学習者の振り返りを促し、自分の言語学習に責任を持てるようにサポートしていくプロセスを指す(加藤・マイナード, 2022, p.3)。

タンデムのガイダンスで使用されるガイドラインには、ペアそれぞれの学習時間が平等になるように、学習活動の時間配分の具体例が示されている。次に「タンデム学習から最大限の効果を得るために大切なこと」として、「学習者の自律性」、「互恵性」、「予習と復習」、「計画と記録と振り返り」、「二人にとって無理なく実行できる予定を立てる」といった項目が示されている。コーディネーターはこのガイドラインを使用することで、学習オートノミーと互恵性という2つの原則に言及することになる。その後、ワークシートを配布し、タンデム学習で達成したい目標、学習頻度・場所、第1回の学習内容、第1回までに準備すべきもの／こと等をガイドラインの記述やコーディネーターからの問いかけを参考にしながら参加者が決めていく。

青木(2016)は、「タンデム学習でするタスクを教師が決めた方がいいか?」という問いに対して、タンデムのガイドラインでは学習者オートノミーを発揮する余地を残すために具体的な活動を指定するのではなく、ガイドラインに学習活動の例を挙げることで、参加者の学習活動のレパートリーを広げるヒントを示していると述べている。また、青木がアドバイジングを行う際は「『こういうこともできるかもしれない』というような強制力を伴わない表現」を使用しているという(青木, 2016, p.103)。

学期の中間で実施されるワークショップでは、自分の目標言語のセッションでの学習内容、パートナーのセッションでのパートナーの助け方、タンデムでやって良かったこと、タンデム学習で困っていること等を参加者が話し合う。参加者が互いに自分の経験や意見を話すことで、各々が直面した困難やその解決法共有する機会となる。また、コーディネーターが困難の解決のための具体案を示す場合もある。タンデムのホームページには過去のワークショップの記録が掲載されており、ワークショップ当日に参加できなかった学習者も参照できるようになっている。

さらに、タンデムで実施するパーティーは、言語学習アドバイジングを行う場ではないが、学習者同士がタンデム学習や留学の経験等を共有する機会となっている。

ここまで述べてきた通り、タンデムでは学習者オートノミーと互恵性という2つの原則に基づいて学習者が自律的な学習を継続していくことが重要となる。そのサポートを行うために、コーディネーターはガイダンスやワークショップの機会において、参加者と対話を行い、言語学習アドバイジングを実施してきた。

4 HELP! におけるコーディネーターの役割

4-1 HELP! でのコーディネーターからの働きかけ

ここからHELP!での取り組みをまとめていく。コーディネーターから参加者への働きかけを行う機会として、まずはオリエンテーションについて述べておきたい。オリエンテーションはメンター、メンティーとも同日に実施されるが、開始時間が異なる。メンターは午前中から集合し、ガイダンスを受けた後、BCによるIELTSの教え方に関する講座や、英検協会による日本の学校教育における英語教育と英

語学習者の実態に関する講座を受ける。

メンティーは午後から参加し、HELP! やIELTS テストについての概略、ウェブサイト MEnTOR system の使い方、第1回目のメンタリング課題や毎回のメンタリング（カルテ、IELTS スコア報告、注意点など）、よくある質問（メンタリング英語学習方法、交流会）についての説明を受ける（オリエンテーションの内容は部分的には後述のメンティー募集説明会の内容と重複する）。このセッションは日本語で実施されるが、それ以外のメンターが参加する場面では英語でオリエンテーションが実施される。

メンターとメンティーがそれぞれのガイダンスを受けた後、メンターとメンティーの合同セッションが実施され、メンターとメンティーのペアが顔合わせをする時間となる。8回の学習計画を立てたり、連絡先の交換を行ったりした上で、メンティーはスケジュールシートの提出や第1回のメンタリングに向けたタスクに関する説明を受ける。このように1日かかりのオリエンテーションが終了すると、HELP! のメンタリングが開始される。

表3 HELP! の参加者・修了者数

時間	メンティー 応募者数	メンター 応募者数	ペア数	修了証の 発行数	修了率
第1期	32	14	11	9	81.8
第2期	22	8	7	6	85.7
第3期	41	24	22	15	68.2
第4期	47	37	33	25	75.8
第5期	45	16	30	27	90.0
第6期	42	24	37	31	83.8
第7期	38	36	35	27	77.1
第8期	31	26	31	27	87.1
第9期	39	29	27	27	100.0
第10期	45	26	34	34	100.0
第11期	48	17	23	21	91.3
第12期	25	12	14	13	92.9
第13期	50	23	26	24	92.3
第14期	18	14	15	15	100.0
第15期	21	11	11	11	100.0
第16期	35	19	20	18	90.0

青木（2016）では、タンデムのコーディネーターによる学習のモニターについて言及されていたが、HELP! では MEnTOR system に提出されるメンティーによるカルテ（学習記録）とメンターのコメントによって進捗状況を把握する。さらに、コーディネ

ーターは、メンタリングの途中経過を把握するために中間アンケートを実施している。学期末に8回分のカルテや完了後アンケートの回答がない場合は、コーディネーターから参加者に連絡を行う。修了条件である8回以上のメンタリングを実施していたのにも関わらず、メンティーがカルテを記入していない場合は、メンターに対して修了証を発行することができなくなってしまうため、コーディネーター（事務スタッフや特任助教）からメンティーに繰り返し提出の催促を行う。2015年度から2022年度までの修了率は表3の通りであり、概ね高い水準で維持してきたと言える。特に第11期以降は新型コロナウイルス感染症の流行期にあたり、オンラインでの実施を余儀なくされた時期もあったが、修了率は上昇している。

4-2 HELP! のコーディネーターが加えた変更点

HELP! のコーディネートの成功を確認する手段として、中間・期末のアンケートを実施してきた。1つの学期が終わるとコーディネーターが集う反省会を行い、アンケートの結果も踏まえた今後の改善点を検討してきた。

本節ではコーディネーターのうち、第三筆者（垣塚）の在任期間（2018年度～2022年度）に焦点を当て、HELP! のコーディネートについて特筆すべき点を述べていく。中野・近藤（2019）では、中間・期末アンケートを踏まえて2018年度に行った改善点として以下の7つを挙げている。

- ①募集締め切り前にHELP! 説明会を2回実施
- ②メンティー応募用紙に、「日本語ができるメンター希望」という欄を追加。ただし、希望に添えない場合、マッチングの可能性が低くなるという説明文も記載。
- ③メンターの応募用紙にのみ趣味記載欄を追加
- ④メンティーの提出書類である事前課題のエッセイに趣味も含めた自己紹介文を書く課題を追加
- ⑤BCに、タブレット端末で使えるアプリやサイトを提供して頂きたいと依頼
- ⑥オリエンテーション時に配布する紙媒体の資料をPDF化し、クラウド上で共有
- ⑦自由参加のランチ交流会を実施

（中野・近藤，2019，p.40）

以下では、これらの変更点について詳細を述べていく。

①はHELP!の制度への理解の促進のために行われている。メンティー募集説明会「HELP! ミニ説明会」では、「HELP! について」、「MEnTOR System」、「IELTSとは」、「メンターとは」、「メンティーとは」、「メンティーの選考基準」、「メンティー応募の注意点」、「メンティーのやるべきこと」、「メンタリングとは」、「メンタリングの目的と内容」、「メンタリング90分の計画例」、「メンター・メンティーの役割」、「過去のメンティーからのアドバイス」、「HELP!の応募方法」といった項目を簡潔に説明した後、Q&Aセッションを設けている。HELP!は国際交流のためだけでなく、IELTSの点数を上げるために実施しているということや、メンターが必ずしも英語のネイティブスピーカーではないことを事前に十分に説明することで、ミスマッチを防ぐようにしている。

円滑なマッチングを行うために、②のように応募用紙にも変更を加えている。③、④はオリエンテーションにおいて初対面となるペアの交流を促進するための変更である。このような変更の背景には、メンターはメンティーの書いたエッセイを読むことができるため、オリエンテーションの際の最初の会話の手がかりがあるが、メンティーは会話を始めるための手がかりがないため、趣味を書いてもらう欄を設けた方がよいというメンティーとして参加した学生からの意見があった。

⑤で学習リソースに言及されているように、メンティーが学習内容を準備することの大切さについては、アンケートにおいてメンターから声があった。これを踏まえて、メンティー募集説明会やオリエンテーションでメンティーが主体であると伝えるようになった。メンティー向けのオリエンテーションでは、学習リソースの紹介をすることで準備が重要であることを強調している。MEnTOR Systemでは過去の参加者が作成した学習リソースも共有されており、参加者が利用できるようになっている。

対面でオリエンテーションを実施していた際にはほとんどの学生がHELP!が貸与するIELTSの学習のための教科書を借りていた。新型コロナウイルス感染症の拡大の影響によりオンラインでオリエンテーションを実施していた期間は、教材の貸し出しの案内をしたとしてもメンティーではなくメンターが借りに来ることが多かった。

⑥で示されているのはHELP!の参加者とコーディネーターのコミュニケーションツールの整備についてである。MEnTOR Systemの使い方についての説明の方法にも変化が生じており、かつてはメンティーを集めて、メンターシステムの使い方を練習する機会を設けていたが、事前に録画した映像を用意し、配信するようになった。

⑦で示されるペア以外の参加者との交流の機会については、毎学期、多くの希望が寄せられる。交流会を実施しているが、授業を受けているキャンパスや都合がつく時間帯が異なるため、参加できない学生も多い。次節では2022年度に実施したワークショップについて紹介する。

4-3 HELP!における学習者オートノミーと互恵性

タンデムでは学習者オートノミーと互恵性という2つの原則に則った働きかけが行われている。参加者は自分で自分の学習内容や方法、それを助けてもらう方法を決めることで学習者オートノミーを発揮し、双方が同じように協力し合うことによって互恵性が保たれる。

第一筆者（林）と第二筆者（中野）は特にタンデムでのワークショップの取り組みをHELP!で応用できると考えた。しかし、HELP!では英語を学ぶメンティー側とそれをサポートするメンター側の関係が固定的であるため、互恵性に関してはタンデムとは別の形態を模索する必要がある。一方、学習者オートノミーを育むための働きかけはHELP!でも応用可能であると考え、2022年度のHELP!では学習者オートノミーの原則に則ったワークショップを企画・実施した。前期での結果を踏まえて後期での実施形態を変更したため、それぞれの内容を示す。

前期はメンティーとメンターの役割が異なることを踏まえ、メンティー向けのワークショップとメンター向けのワークショップを1回ずつ開催した。大阪大学の3つのキャンパスや自宅など、どこからでも参加できるようにオンラインで開催した。タンデムで実施されているワークショップを参考にして、参加者への質問項目を用意しておいたが、メンティー向けのワークショップは、参加者が1名であったため、その学生から留学準備に関する相談を受ける時間となった。

メンターを対象としたワークショップの参加者は3人であり、「あなたのメンターはどのようなスキル

を伸ばすために学習をしていますか」、「あなたはメンティーをどのようにサポートしていますか」、「メンタリングで困っていることはありますか」といった問いに関して一人ずつ話してもらい、経験を共有する時間とした。

前期はメンター、メンティーともワークショップの参加人数が少なかったこと、アンケートでは交流がしたいという声が多かったことを踏まえ、後期はメンティーとメンターの相互の交流ができる形式でのメンター、メンティー合同の対面でのワークショップを企画した。

後期のワークショップの当日の参加者はメンティー5名、メンター1名であり、事前登録者数よりも少なかったため、グループワークの予定を一部変更して実施した。アイスブレイキングの活動として、メンティーの希望留学先や、メンターの出身大学や留学生活の目標など、交換留学に向けた意識を高めることを意図した質問を示し、一人ずつ回答してもらった。その後、メンタリングに関して、学習方法や困難な点、それぞれのアイデアを共有する機会とした。

HELP! では英語学習を行うメンティーとそのサポートを行うメンターが固定的な関係にあるため、その関係を越えた互恵的な関係を築くことが重要となる。しかし、前期のメンター向けのワークショップでは、限られた期間でメンティーの英語力を向上させようと、教え方や使用教材についてメンターが試行錯誤しており、非常に苦勞していることがわかる語りもあった。

アンケートにおいて「英語での会話力だけではなく、回答内容を広げるような指導をしてくれた」、「様々な英語表現をパワーポイントを使用して説明してくれた」等と書いていたメンティーがいたことから、他にも多くのメンターがメンティーのために努力し、メンティーの成長を楽しみにしている様子が見えてくる。しかし、メンティー側が努力をしなければIELTSの点数を上げることは難しいという問題点がある。また、メンティーとメンターがどのような関係を築いているかによって、メンターの努力はメンターの負担感につながる場合もある。

中田(2015)は日本の英語教育において学習者オートノミーが必要とされる理由の一つとして生涯学習という視点を挙げている。受験のための学習は学習者が定める目標への通過点に過ぎず、「やりたいこ

とを実現するために、仲間と意見交換したり切磋琢磨したりして、試行錯誤を繰り返す」ことのできる学習者を育てることが重要であると指摘している(中田, 2015, p.9)。中田の記述は中学校・高等学校での英語教育に焦点を当てたものであるが、これを交換留学のための英語学習に置き換えれば、IELTSの受験は留学への通過点に過ぎず、留学後も引き続き、他者の助けを得ながら学び続けることが求められると言えるだろう。

同じことは現在進行形で留学をしているメンターにも言える。メンターにとってメンティーは助けを得ることのできる他者となり得る。しかし、メンターにとって日本での留学の期間が貴重な時間であるように、留学開始までの手続きに時間を要する交換留学希望者のメンティーにとっても留学準備に残された時間は限られている。このように相互に時間に追われる中で、互いのサポートのために時間を割いてもよいと思える関係を築けていることがHELP!を充実したものにするためには必要であると考えられる。期末アンケートにはメンティー、メンター問わず「よい友達になれた」という回答があった。最低限の8回を超えてメンタリングを継続したペアもあった。将来の留学生活においてどのような存在が身近にいると良いのかをメンターが想像し、メンティーに寄り添うことができるように促していくことが、HELP!における互恵関係を築くためには重要であろう。

5 おわりに

HELP!の主な目的は、大阪大学から海外の大学への交換留学生を増加させるためにIELTSの点数を向上させることである。しかし、英語の習得だけがゴールではなく、その先にある留学を見据えて、留学希望者と留学生が協働で学び合える機会となるよう、コーディネーター間で議論を重ねてきた。

今後、HELP!と同様の英語学習支援プログラムを他大学でも実施していく際には英語を母語(得意な言語)とする学生を集めることが重要な課題となる。大阪大学国際教育交流センター短期プログラム開発研究チームでは、英語で学ぶことができる短期留学プログラムとして、国際教養・専門複合型プログラム(OUSSEP)のコーディネートを発行しており、メンターとなるための英語能力の基準を満たす留学生

が半年ないし1年間というスパンで常に在籍しているという環境にある。一方、英語を話す留学生が少ない環境下でプログラムを実施する場合は、Eタンデムのように、国内外の大学との連携を通して、オンラインでの実施を行うという方法もある。海外との連携の場合、双方とも留学前の学生がペアになることもあるだろう。

それぞれの大学が置かれた文脈に合わせてルールの策定や学生のマッチングを行い、参加する学生が交流を深め、充実した留学生活を実現できるようにプログラムをコーディネートすることが重要である。

謝辞

本稿の執筆にあたり、大阪大学人文学研究科・文学部 タンデム学習プロジェクトのコーディネーターである高木千恵教授、蔡真彦さん、林剣鴻さん、並びに、Project HELP!のコーディネーターの皆様に感謝申し上げます。

注

- 1) HELP!のコーディネーターは近藤佐知彦教授、および宮原啓造准教授(2017年度まで)、北山夕華准教授(2018年度から2019年度まで)、石倉佑季子准教授(2020年度から)、歳岡冨香特任助教(2016年度まで)、中野遼子特任助教(2017年度から2021年度まで)、林貴哉特任助教(2022年度)、井奥智大特任助教(2023年度から)、遠藤美紀特任事務職員(2017年度まで)、垣塚保子事務補佐員(2018年度から2022年度まで)、藤田陸事務補佐員(2023年度から)、松澤早苗派遣職員(2023年度から)が担ってきた(肩書きはいずれも当時のもの)。
- 2) タンデムのガイドラインと同一の内容はホームページ(大阪大学大学院人文学研究科, n.d.)に掲載されている。また、WEB上でアクセスできるタンデムのガイドラインには脇坂(2015)がある。

参考文献

- 青木直子(2016)「タンデム学習:FAQと経験知からの回答」『ことばと文字』第6号, pp.98-106.
- 青木直子・中田賀之(2011)「学習者オートノミー:初めての人のためのイントロダクション」青木直子・中田賀之(編)『学習者オートノミー:日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房, pp.1-22.

青木直子・脇坂真彩子・欧麗賢(2013)『2012年度タンデム学習プロジェクト報告書』大阪大学大学院文学研究科・文学部国際交流センター。

大阪大学(2023)『海外留学にチャレンジしよう2023-2024』https://www.osaka-u.ac.jp/ja/international/outbound/ex_students.html/files/studyabroad-pamphlet.pdf(2023年12月4日アクセス)

大阪大学大学院人文学研究科(n.d.)「タンデム学習プロジェクトについて」<https://lt.hmt.osaka-u.ac.jp/ja/humanities/international/tandem/overview>(2023年12月4日アクセス)

加藤聡子・マイナード, ジョー(2022)『リフレクティブ・ダイアログ:学習者オートノミーを育む言語学習アドバイジング』義永美央子・加藤聡子(監訳), 大阪大学出版会。

小林浩明(2016)「タンデム学習の意義と可能性」『北九州市立大学国際論集』第14号, pp.135-145.

歳岡冨香(2016)「留学生とのメンタリングによる英語学習支援の試み」『大阪大学高等教育研究』第4号, pp.87-91.

中田賀之(編)(2015)『自分で学んでいける生徒を育てる:学習者オートノミーへの挑戦』ひつじ書房。

中野遼子・近藤佐知彦(2019)「留学生との英語学習プログラム“Project HELP!”の実践報告:アンケート結果の分析を中心に」『多文化社会と留学生交流』第23号, pp.35-41.

脇坂真彩子(2012)「対面式タンデム学習の互恵性が学習者オートノミーを高めるプロセス:日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』第24号, pp.75-102.

脇坂真彩子(2015)「タンデム学習のガイドライン」<https://isc.kyushu-u.ac.jp/center/tandem/index.html>(2023年12月4日アクセス)

脇坂真彩子(2016)「日本とドイツの大学生によるEタンデム:インターネットを介した学習者同士の学び合い」『ことばと文字』第6号, pp.88-97.

脇坂真彩子・林貴哉・北川夏子・ヴォランスキ、バルトシュ・原田佳祐・蔡真彦(2020)「日本の大学におけるタンデム学習の意義」『JASAL Journal』1(1), 104-128.

Little, D., & Brammerts, H. (Eds.). (1996). *A Guide to language learning in tandem via the internet*. CLCS Occasional Paper, no. 46. Dublin, Ireland: Trinity College, Center for Language and Communication Studies.